

宋代禅宗の中期高麗禅宗への思想的影響

要旨

花園大学 梁 特治

はじめに

本研究は二部構成である。第一部では宋代(960~1279)の禅宗に焦点を当て、中でも看話禅の成立に深く関わる大慧宗杲(1089~1163)の邪禅批判について、黙照禅の確立者・宏智正觉(1091~1157)と大慧の黙照禅批判の対象とされる真歇清了(1088~1151)の禅思想解明を通じ、大慧の邪禅批判の真相とその歴史的意義について考察した。

続く二部では、研究範囲を高麗中期(1170~1270)の禅宗にまで拡張し、普照知訥(1158~1210)の看話禅思想を中心に、真觉慧諶(1178~1234)、普觉一然(1206~1289)、宝鑑混丘(1250~1322)、慧鑑万恒(1249~1319)らの看話禅を中心とする宋代禅思想の受容と13世紀高麗禅文献の分析を通して、宋代禅宗の中期高麗禅宗への思想的影響について考察した。

1. 本研究一部の要旨

先ず大慧の黙照禅批判については、基本的に看話と黙照の修証観の相違が根底に存在する。その批判の主たる論点には妙悟の撥無や坐禅の固執、そして黙照邪師の下で参禅する人々の誤った禅理解などが挙げられる。一方、大慧が批判した「邪師」の中には禅浄双修思想を根幹とする参禅念佛者も含まれ得る。その参禅念佛者である慈照子元(1096?~1181)は従来の大慧の邪禅批判の研究では殆ど認識されなかった人物である。

本研究五章では、子元と大慧との関連性について考察した結果、子元が大慧の邪禅批判の対象となっていた可能性は高い。

大慧の真歇批判に関しては、真歇の『信心銘拈古』を検討した結果、『拈古』は、真歇が三祖『信心銘』の宗乗を明確にすることで当代の形骸化した禅風を正し、後学に『信心銘』の根本命題を覚らしめるものであった。中でも大慧の真歇批判の有力な証拠とされる『拈古』末尾の義遠の跋文に於いても大智(1290~1366)の『真歇和尚拈古抄』等の古注本を検討した結果、『拈古』が大慧の批判に反論する為のものとする義遠の跋文の見解は宗派意識からくるもので内容的にも妥当性に欠けるものであった。

また、真歇の『劫外録』『拈古』を検討した結果、真歇の禅は四威儀に於ける動静一如・惺寂一如の徹底した本証自覚の禅であり、大慧の真歇に対する批判内容とは明らかに径庭があった。一方、同門の真歇と宏智の禅は軌を一にするものであり両者に決定的な相違点は見出せないが、あえて言うならば、真歇の禅が宏智の禅よりも比較的に始覚門的傾向が強い。それは『劫外録』『拈古』の中には「向上」の徹底が繰り返し強調されるからである。

総じて、大慧の真歇批判は、大慧の真歇禅に対する理解や修証観の相違以外にも、真歇との性格上の共通した特性に加え、活動拠点が接近したことや、それに伴う有力支持者の獲得という地理的・政治的背景が複雑に絡み合った結果の中で生じたものであったのである。

大慧の邪禪批判の目的が、看話禪による禪風刷新と「禪」の大衆化にあったことは事実である。しかし、それには当地の有力な支持者獲得による寺院運営の安定化も必要であったのであり、彼等の活動拠点や社会情勢、並びに地理的条件も併せ考えてこそ大慧の黙照禪批判、特に真歇批判の真相が見えてくるのである。

かくして大慧は、妙悟を撥無し坐禅だけに固執する黙照邪師や「叢林のある種」の邪な禪者への激しい批判を通じて、話頭参究の優位性と開悟の必要性を公に示し、絶大な社会的支持を得、宋代禅宗の主流となる看話禅を大成させるのである。

したがって、大慧の邪禪批判と看話禅確立は表裏一体の不可分の関係にあり、大慧は邪禪批判の代案として看話禅を確立するのである。

やがて大慧の禅は、隣国高麗の知訥(1158~1210)や慧謙(1178~1234)、さらには南宋後期の無門(1183~1260)らによって定型化され、東アジアを中心に広く普及してゆくのである。

2. 本研究二部の要旨

本研究二部の序章では、海東三国の仏教受容から羅末麗初(9世紀半~1170)の禅宗までを思想的観点から考察した。その中で新羅前期に入唐して四祖道信の法を伝えた法朗(630前後~730前後)について、高麗版初雕本を基に復刻された天順本『菩提達摩四行論』末尾の新資料を基に法朗の思想的探索を試み、彼の達磨禅初伝の意味について考察した。

本資料に収録する「朗禅師」の所説には、前半に「看心」「存心」などの思想が示され、後半には道信と同様の「直須任運」思想が示される。「看心」の用い方も道信と同様に初学の方便門と見做せば、法朗の禅の本領は道信が示した「直須任運」の禅である。

以下、第一章以降の要旨である。

12世紀初の高麗では慧洪の『禅林僧宝伝』をはじめ当時盛行した黄龍派の思潮が流入し、『景德伝灯録』『楞嚴経仁岳集』『雪竇拈頌』といった灯史・語録類が伝来したことで、宋代の禅思想が波及した。特に参加者が500人規模の談禅法会において、上の三書が講義資料に採用されたことは、当時禅門では既に公案禅が盛行し、古則公案を提撕できる善知識が存在したことを示すものである。この様な公案テキストの普及は、やがて知訥が看話禅を挙揚する方向へと向かい、慧謙の看話禅風にも密接に係わっていくのである。

知訥の思想に関連して、彼が『大慧語録』に接する以前に修した内観の行とは、彼が『結社文』に援用する『禅宗永嘉集』の「奢摩他頌第四」「十疑論註」「普菴語録」などの記述からも「定慧等持して明らかに仏性を見る」回向返照の止観行(非行非坐・一行三昧)であった。

知訥の修禅体系の軸となる三玄門については、宋代に於ける臨濟三玄の思想変遷という流れの上で考察した。中でも『禅林僧宝伝』第12巻所収の「薦福古禅師章」を基に、承古の三玄説と慧洪の承古・三玄説批判を手掛かりに、大慧の看話禅を如何に自らの修道体系に位置付けたかについて考察した。

承古三玄説は、承古が従来の「三玄門」に修禅階梯を施設し禅宗の教判的範疇に沿って体系化したものである。知訥は承古の三玄門の上に看話径截門を施設することで、知解の弊害をも克服する修道体系を確立する。

一方、知訥は唯心唯識の道理を教法とする法眼宗や事事無碍を説く華嚴円教を初玄門に位置付けることで、「多種の根機」の修行者に禅宗径截門に入門する機会を提供した。

知訥の看話禅思想が最も明瞭に表れる『決疑論』では、特に径截門の重要な指標となる「全提・破病」「活句」「十種病」等の分析を通して、知訥の径截門の特質について考察した。

知訥は『決疑論』の中で、「十種病」を示すが、その中の八句は『大慧書』「答富枢密」第一書に依拠し、残り二句は『大慧書』「答張舍人状元」の中から補足する。

知訥は大慧の言説に準じて、滋味無き話頭の活句参究に徹してこそ、一切の義理分別を断じて無障礙の法界を親証できるとし、これを禅宗径截門の話頭参究の要諦とするのである。

「全提」については、『玄沙広録』巻2、『碧巖録』第2則、『無門関』第1則、『従容録』巻6の用例から見て、いわば全体の働き(仏性)を明らかにするという意味であり、自己の全分(全体そのまま)を余す処なく表すという「全分提起」を意味する。

知訥は『決疑論』の中で、話頭を打破してこそ、はじめて「全提」し得る一句となるのであり、話頭の参究中には「自己の全分を表す」という念は無く、もし一念でも「全提の解」を擬すれば、悟りの弊害である「意根下卜度の病」に落ちて活句の参究にはならないと誡める。一方、「破病」については、『景德伝灯録』巻4「牛頭章」の中で、四祖道信は「方便にして妙言を説き、病を破するは大乘の道なり。本性譚(仏典)と関わるに非ずして、還って空に従りて化造せり」と説く。つまり、道信のいう破病とは、方便の妙言によって分別迷妄を打破することであり、それを道信は大乘の道であるという。

知訥は、[分別迷妄を打破する]破病であっても「破病の念」で密旨を晦ましてはならず、もし一念でも「破病の解」を擬すれば、「意根下卜度の病」に落ちて活句の参究にはならないと誡める。つまり、知訥は話頭参究中には「全提・破病」という念までも滅し尽してこそ、はじめて活句の参究になると論したのであり、ここに大慧禅を承ける知訥の活句禅の本領がある。かくして知訥は話頭参究こそが禅宗径截門の悟入の秘訣であると明言し、看話禅を確立した大慧に対し曹溪南宗禅の正統な本分宗師であると称賛する。

以後、知訥の看話禅優位思想は、修禅社二世慧謙によって更に深化され宣揚されることで海東禅門の方向性が決定づけられるのである。

次に、修禅社に代わって仏教界を主導することになる一然(1206~1289)は、禅源社の開堂で「法を遥かに牧牛和尚知訥に嗣ぐ」と表明する。それは彼が修禅社の地位を引き継いだという表明に加え、思想的には知訥の結社運動の基となる教禅一致の融合理念を柔軟に受容してゆくという決意の表れであった。しかも、一然は知訥が齎した看話禅の伝統を継承しながら、より多様性を以て宋代禅思想を受容した。その背景には彼が南宋期までの最新の禅思想を一大集成することで、高麗禅宗の思想体系を完成させようとした意図が看取できる。

かくして一然の思想は、南宋期の儒学興隆に見られる教禅一致や三教一致などの融合・調和を重視する特徴を持ち、それは知訥の教禅一致思想とも合致するものであった。

一然に続いて禅界を主導した混丘(1250~1322)と万恒(1249~1319)は、高麗中期以降の禅宗に絶大な影響を与えた臨济宗楊岐派10世蒙山徳異(1231~1308)の看話禅風を受容した。

こうした高麗中期以降の蒙山禅思想の積極的な受容には特に修禅社が深く関わった。その背景には、教勢の拡張という喫緊の課題に加え、知訥が齎した看話禅に対する伝統意識が大きく影響している。

次に、『禅門拈頌集』『狗子無仏性話揀病論』『禅門綱要集』を中心に、13世紀の高麗禅文献を通して、宋代禅宗の中期高麗禅宗への思想的影響について考察した。

先ず『拈頌集』の編纂は、慧謙率いる修禅社が看話禅とともに公案の研鑽にも力を注いでいたことを裏付けるものである。また『拈頌集』には引用文献や著語に於いて宋代臨濟禅の圧倒的影響が見られる。それは修禅社が臨濟禅の正統な法脈であることを示すとともに、教勢拡張と禅風挙揚の為に五家の中でも特に臨濟禅の思想を積極的に受容した結果であった。

次に『揀病論』に見られる慧謙の禅風は、知訥と同様に大慧の無字話頭を第一にそれを強力に宣揚し、「十種病」でも大慧と知訥の「十種病」を承けてそれを更に深化させている。くわえ、慧謙は基礎的な修禅要諦として止観定慧を示し、話頭参究中に止観定慧は自ずと顕現すると説く。こうした慧謙の禅は定慧一等・無字話頭を推奨する大慧と知訥の禅を更に継承発展させたものである。

次に『綱要集』では、特に撰者について、「智理山鷲谷寺事蹟」を基に慧昭—玄覚—「真浄天頌」(13世紀中盤)に連なる門派が智異山鷲谷寺を中心に存在したという鄭栄植説を踏まえ、本研究では「一愚説」末尾の「於末代中、再振臨濟宗風者」の解釈を取り上げ、「臨濟宗風の再振」とは、宋代臨濟禅を伝播し高麗初期の禅門を興した慧照・坦然の臨濟宗風の再興であると見、「真浄天頌」が、慧昭・玄覚に連なる馬祖系の法孫であり、「玄覚禅師教外堅禅章」を収めた『宝蔵録』の撰者であり、智理山鷲谷寺を重興した内願堂「真静」大禅師であるとすれば、「天頌」が臨濟禅の綱要を中心に構成される本書を著した動機は十分にあると結論付けた。

基本的に高麗中期以降の禅者は、『景德伝灯録』『拈頌集』『綱要集』などの宋代の公案集や機関の綱要書に精通し、そうした素養を踏まえた上で、『書状』『決議論』『揀病論』『蒙山法語』『禅要』といった看話禅の指南書を通じて話頭参究に専心したのである。

総じて、高麗中期以降の宋代禅宗の思想的影響は、偏に11世紀末より12世紀中葉にかけて、迦智山・学一とともに当時の禅門復興の基礎を築き宋代臨濟禅を伝播した闍堀山・慧照、坦然をはじめ居士李資玄らの活躍と12世紀中葉以降に台頭する修禅社の知訥・慧謙、そして迦智山・一然らに依るものであった。中でも注目すべきは、高麗中期に刊行される宋代禅文献の多くが、修禅社の主導で刊行されたという事実である。

そして、莫大な資金調達を要する刊行事業に於いて、それを十分に支援できる国家と有力支持者が存在したことも、高麗に宋代禅思想を浸透させる要因となったのである。すなわち、武人政権二代目・崔怡ならび豪族出身の鄭晏などがそれである。それに加え高麗中期の宋代禅思想の受容には、修禅社を中心に看話禅や公案テキストが普及した一方で、『祖堂集』や『宗門円相集』、法眼宗系の『宗鏡録』、雲門宗系の『禅苑清規』や『宗門遮英集』、曹洞宗系の『重編曹洞五位』といった禅宗五家の多様な思想が幅広く受容された。そこには当時の知訥・一然らが、五家の伝統を重視し、その思想を基に時代に適応した統合的な仏教思想体系を絶えず模索していったことが大きく影響していたのである。

当に高麗中期禪宗に於ける宋代禪思想受容の重要な鍵となったのは統合的な融合調和の理念であったのである。

なお、本論文には、2017年に花園大学で開催された「臨濟録・国際学会」の論文集『臨濟録・研究の現在』（「資料編・付録1」）に掲載された論稿の補訂版「朝鮮半島に於ける『臨濟録』の刊行と展開」を附録した。その概要は、半島に於ける『臨濟録』の高麗・朝鮮時代における刊行流布の形跡と、韓国『臨濟録』研究の現況について論述したものである。